

メルロ-ポンティの知覚論の射程

山倉 裕介

はじめに

主著である『知覚の現象学』の中で、メルロ-ポンティ⁽¹⁾は標題通り知覚を論じている。だがまた、その知覚の成立と不可分の形で存在についても論じている。そこで本稿の目的となるのは、『知覚の現象学』における知覚論から存在論への筋道を明らかにすることである。以下では、メルロ-ポンティの知覚論の核心部分と考えられる展望という仕組みについて先ず概観する(1.)。次に、そうした知覚を成り立たせている存在論の特徴として、世界(存在・事物)と私(主体)の関係について検討する(2.)。そして最後に、『知覚の現象学』における知覚論と存在論の繋がりを確認する(3.)。

1. 知覚における展望

(1) 展望という構造

メルロ-ポンティの知覚論の鍵となるのは展望 perspective である。ゲシュタルト理論の「図と地の関係」を発展させた考え方である。見え vision というものについてのメルロ-ポンティの捉え方から始めると、対象と地平の関係に関して次の記述が在る。

「一方の対象が隠れないことには他の対象は現われ得ない、という一つの体系を諸対象は形成する。一層正確に言うと、周囲を取り囲む諸対象が地平となるのでなければ、或る対象内部の地平は対象にはなり得ない。見えとは、二つの面を持った行為のことである」⁽²⁾。[PP82 頁]⁽³⁾

見えという行為には、或る対象を現われさせる働きと当該対象以外を隠す働きという二面が不可分に備わっている、とされる。ここでの「一つの体系」とは、或る対象が現われる時には他の対象が隠れるという体系のことである。或いはまた、或る対象が対象となって見られることの裏面として、当該対象以外は地平となって背景に退かなければならない、という体系のことである。現われ(させ)ることと隠すことが表裏一体となって見えの中に含まれている、という着眼が重要である。

この「対象と地平の関係」を知覚の構造へと拡張したものが展望である。

「対象を見たいと私が欲する時に、対象-地平の構造すなわち展望が私の邪魔になる訳ではない。この構造とは、諸対象が姿を隠すための手段であるならばまたそれらが自らを明らかにするための手段でもある、そういうものことである。見ることは、姿を見せる諸存在者の世界に入り込むことである。互いの背後或いは私の背後に隠れることが諸存在者に可能なのでなければ、それらは姿を見せないであろう。言い換えると、或る対象を眼差すこととは、その対象に住み付きに来ることであり、全ての事物が当該対象へと向けている面に即してそれら諸事物をそこから捉えることである。しかし、そうした諸事物をも私が見ているのに応じて、それら諸事物は私の眼差しに対して開かれた住まいであり続ける。そうした諸事物の中に潜在的に位置付けられて、実際の私の見えの中心的对象を様々な角度で私は既に統覚している。」 [PP82 頁]

展望とは、「諸対象が姿を隠すための手段であるならばまたそれらが自らを明らかにするための手段でもある」ものこと、とされる。世界の中に「入り込む」時、そして対象に「住み付」く時、私にとって開けているのが展望である。或る対象を私が見る場合、周囲を地平にして当該対象を見るのと同時に、隠されたものとして周囲の地平を見ており、また地平となった周囲からの当該対象の見え(見えなさ)具合をも私は見ているのである。全体としてこのように捉えるならば、或る対象を見ることとは、当該対象を見えるものとする配置を持った展望に接することなのである。この意味で、展望は私の知覚の構造である。

明らかにするために隠すというこの構造を世界全体に適用すると、隠される部分があって初めて見える部分があるということになる。またこれと表裏をなす事柄として、世界は全面的に開かれて在ることとなる。全面的に開かれているからといって全面的に見える訳ではなく、見えない部分が在ることによって見える部分が出る、ということである。

(2) 展望と身体

展望という仕組みで重要なのは身体の在り方である。つまり、私の持つ展望の基点には常に私の身体が在ること、身体を以って私は世界を知覚すること、である。

「私の身体の展望が諸対象の展望の特殊な場合ではないばかりではなく、諸対象の展望的な見てくれが了解されるのはあらゆる展望的变化に対する私の身体の抵抗によってでしかないのである。諸側面の内の一つしか諸対象が決して私に示さないのではなければならないとすると、それは以下の理由からである。すなわち、そこから私が諸対象を見る

場所であって私には見えない場所、そういった或る場所に私自身が在るからである。」
[PP108 頁]

展望が先ず在ってその中に身体を位置付けるのではなくて、身体が先ず在ってそこから展望が開けるのである。身体を基点とすることによって初めて、「諸対象の展望的な見てくれ」が始まる。展望の基点であるからには、身体は「そこから私が諸対象を見る場所であって私には見えない場所」であることになる。あらゆる所が見える(見え得る)筈の展望にあって唯一原理的に見えない(見られ得ない)所、それが身体なのである。展望をなす世界の中で身体は「常に言外に仄めかされた第三項のこと」[PP117 頁]とされる。身体が「第三項」として挿し込まれることで、どこまで行っても図と地平の相互関係しかない所に、その身体を基準とする方向 *sens* が特定される。

「私にとって私の観点とは、私の経験の或る限界のことであるよりはずっと、世界全体の中に滑り込む或る仕方のことである。」 [PP380 頁]

身体を以って世界に在ることで、その身体故に見えなくなる側面も確かにあるのだが、見えなくなる側面があることでむしろ世界に方向性(意味 *sens*)が生じ、そこから了解が可能になるのである。

(3) 世界に内属している私

以上のような具合で知覚が成り立つとすると、世界と主体の在り方はどうなるのか。

「知覚的な経験が私達に示すのは、存在との私達の原初的な出会いにおいてその諸事実(引用者注：身体と世界の関係にまつわる諸事実)が前提されていることであり、位置付けられることと存在は同義であることである。」 [PP291 頁]

何か中立的な空間に主体や対象を置いて空間・主体・対象の関係を論じるのはいわば二次的な思惟である。それに対し「原初的な出会い」である知覚では、既に世界や存在が前提されている。その意味で、世界に位置付けられること *être situé* と世界や存在を知覚することが一つの事柄となるのである。知覚と存在(世界)とを切り離して考えることは出来ない。事物等についての知覚と世界や経験の体系とが直接に結び付くことが語られる中で、知覚する私と知覚される世界の関係について次の記述が在る。

「私が神であるかのように、私の前で経験の体系が展開される訳ではない。或る一つの観点から私によってその体系は体験される。私はその体系の観察者ではなく、その部分である。そして、私の知覚の有限性を可能にすると同時に、あらゆる知覚の地平としての全体的な世界へのその知覚の開けを可能にしているのは、或る観点への私の内属である。」 [PP350 頁]

私は神ではないのだから、世界や経験の体系を全面的に見渡せる訳ではないのはもちろんのことである。そればかりではなく、世界や経験の体系の観察者の立場にも私は立たない。「或る一つの観点から私によってその体系は体験される」とが「その部分である」とは、世界の中に私が状況付けられて在るということである。状況付けられている私の観点からする知覚には、どうしても知覚の及ばない所が出てくる。つまり「或る観点への私の内属」の故に、展望を持った知覚が可能になるし、世界を地平とすることが可能になるのである。

ここで、世界に内属している私の観点からする世界の知覚、というのが知覚論の基本になるとすると、世界に内属している私、というのが存在論の基本的な構図になる。以下、「世界に内属している私」を基本的な構図と捉えることとする。

2. 世界と私

前節では、展望という仕組みから始めて、「世界に内属している私」という基本的な構図に辿り着いた。本節では、この構図を出発点として、『知覚の現象学』における世界(存在・事物)と私(主体)の関係を検討する。その際、デュシェーヌの「メルロ-ポンティの『知覚の現象学』における現象化の構造」⁽⁴⁾を参考にし、世界と私の間の調和的な側面と不一致な側面を順に見ていく。

(1) 世界と主体の調和

知覚の成り立ちを論じる文脈において、知覚・感覚の匿名性と部分性という二つの事情をメルロ-ポンティは指摘する⁽⁵⁾。両事情を要約すると、「全ての感覚は或る領野に属する」 [PP250 頁]ということになる。これはすなわち、視覚的存在・触覚的存在という諸々の存在に対応して視覚的領野・触覚的領野といった体系を私が有している、ということである。

「一種の原初的な契約や自然の恩恵によって」 [PP251 頁]、私の側では何の努力もしないままにこの体系を私は手に入れる。何をやるまでもなく契約や恩恵によって齎される体系に従って感覚が得られる点で、感覚は前人格的である(匿名性)。また、存在(世界・事物)

には可感的でさえもないものも在る中で、領野(視覚的領野・触覚的領野)という分節化に合致した部分の存在(視覚的存在・触覚的存在)を感覚する、ということでもある(部分性)。こうした事情を踏まえるならば、「私は諸感官を持っていて、それらによって私は世界に達する」[PP251 頁]ことで意味されるのは次の点である。

「構成的な作用によって存在の或る諸局面に意味を与えておくことを私自身はせずに、そうした諸局面に一つの意味を見出すことが共通の本性 *connaturalité* によって私には可能である、ということである」[PP251 頁]

存在(世界・事物)と接する際に、その存在を局面へと分節化して意味を与える作用を私自身が行う必要はなく、「共通の本性」によって分節化された(存在の)諸局面にこれまた「共通の本性」に従って私は意味を見出せば良いのである。「共通の本性」のお蔭で、容易にかつ確実に私は世界に達するのである。ここでの「共通の本性」とは、私と世界とが共に有している性質のことである。つまり、知覚・感覚に先立って私と世界の間には繋がりが在る。知覚を通じて世界と私が接するには、「共通の本性」の存在が前提とされるのである。ここに、私と世界の基本的な共通性を見て取ることが出来る。

それでは「共通の本性」とは何のことなのか。最初の知覚に先立って何らかの空間水準が必要となることを論じる文脈の中に次の記述が在る。

「私の最初の知覚及び世界に対する私の最初の手懸かりが私に現われるのは、X と世界一般との間でずっと昔に締結された或る協定の履行としてでなければならない。また、私の歴史とは或る先史の続きのことであって、その既得の諸帰結を私の歴史が利用するのでなければならないし、私の人格的な実存は前人格的な或る伝統の取り戻しでなければならない。したがって、私の下に別の主体が存在する。その別の主体にとっては、私がそこに在る以前に或る世界が現実存在し、その別の主体が私の場所をそこに指示していたのである。自由を奪われたこの精神或いは自然なこの精神、それは私の身体である」[PP293-294 頁]

この^{くだり}件で「ずっと昔に締結された或る協定」とされているのが先の「共通の本性」と同じものである。或いはまた「既得の諸帰結」・「前人格的な或る伝統」とされているのも同じもののことである。世界(存在・事物)と私(主体)の間に在る「共通の本性」は人格的な私に先立つものであって、その意味で伝統的なものであり前人格的なものでもある。そして

私(主体)の側から言うならば、そうした「共通の本性」に当たるのは匿名の機能としての身体である。身体の或る機能こそが、私と世界を結ぶ共通性の正体である。さらに、次の記述が在る。

「空間及び一般に知覚が主体の核心に記すのは、主体の誕生という事実であり、その身体性の絶え間ない貢献であり、思惟よりも古くからの世界との意思疎通である。」[PP294頁]

伝統的で前人格的なものとしての身体を介した形での世界と私の遣り取りというのは、最初の知覚の場面に限られるものではない。知覚の度毎に不断にやり直されており、「世界との意思疎通」となっている。

以上で論じてきた通り、世界(存在・事物)と私(主体)は身体で結び付いている。その身体には、「共通の本性」であるとか「ずっと昔に締結された或る協定」・「既得の諸帰結」・「前人格的な或る伝統」といった機能が備わっている。身体を介して世界と私は絶えず意思疎通を行っている、というのが「世界に内属する私」という構図における世界と私の調和的な側面である。身体という「共通の本性」・「協定」を介することで私は世界を知覚する。

(2) 世界の計り知れなさ

世界と私の間には、上述のような調和的な側面が認められる一方で、一致しない側面も在る。その内の世界の側の事情を先ずは検討する。世界の計り知れなさに関する記述として次の件が在る。

「総合が行われるのは、...(中略)...諸経験の内の最後のものによって事物の自己性の内に諸経験が全て寄せ集められる限りにおいてである。もちろん、自己性は決して到達されない。私達の知覚の下に入る事物の各局面とは未だに、向うを知覚することへの誘いのことでしかないし、知覚過程における一時的な停止のことでしかない。もしも事物自体が到達されるとしたら、それ以降、私達の眼前でしかも謎の無い状態でその事物は陳列されることになるだろう。それを所有すると私達が思い込んだ正にその瞬間に、事物として現実存在することをその事物は止めてしまうだろう。したがって、事物の《実在性》をなすものとは正に、私達の所有からその事物を掠め取るもののことである。」[PP269-270頁]

或る事物に係る知覚の総合が行われるとしても、事物の自己性には達しない。つまり知覚は決して完成に至らない。知覚されている事物の局面は「向うを知覚することへの誘い」に過ぎないし、どこまで行っても「知覚過程における一時的な停止」に留まるのである。知覚によって世界と私が一致してしまったならば、世界を私が捉えたことになるのではなく、世界は存在しなくなる、ということである。

知覚される事物(世界・存在)に着目してこの事態を捉えるならば、更なる「向う」であるとか「謎」といったものを事物(世界・存在)は常に残しているのである。これが世界の計り知れなさである。事物(世界・存在)は常に未完成であって過程に留まる、とも言える。さらに、次のような記述が在る。

「事物と世界にとって本質的なのは、《諸々の開かれたもの》として現われることや事物・世界の一定の表示の彼方へと私達を送り返すこと、《見るべき別の事物》を常に私達に約束することである。」 [PP384 頁]

私にとって事物・世界(・存在)は「《諸々の開かれたもの》として現われる」のである。事物・世界(・存在)のその現われには「彼方」が在り、そこには事物・世界(・存在)に関する「《見るべき別の事物》」が常に在るのである。どこまで進んでも、事物・世界(・存在)と私は完全には一致しない。事物・世界(・存在)の本質は文字通り計り知れないものなのである。

(3) 主体の側の曖昧さ

続いて、世界と私の一致しない側面の内の私(主体)の側の事情を検討する。私の側での一致しない側面ということでは、私自身に対する私の不一致と、私と世界の間での不一致とが考えられる。ここでは先ず、私自身に対する私の不一致の方を採り上げる。

自分自身について知覚する時、つまり内的に知覚する時、思惟はそれ自体と合致する訳ではない。こうした不一致からどういった事態が生じるのか。

「事物を再構築することは私には出来ないけれども、知覚される諸事物は存在する。同様に、逃れて行く自分の生と合致することは私には決して出来ないけれども、内的な諸知覚は存在する。同じ理由から、自分自身に関しての錯覚と真理とが私には可能になる。すなわち、その行為に集中することで私は自らを超出する、そうした諸々の行為が在る、ということである。」 [PP439 頁]

外的事物を私は構成出来ないにも拘わらず、外的に知覚される事物は存在する。同様にして、自分の生と合致することが私には出来ないにも拘わらず、内的な諸知覚は存在する。そして、外的な知覚や内的な知覚が成立するのと同様の理由で、「自分自身についての錯覚と真理とが私には可能になる」とされる。私が私自身と合致しないという事態の中味をこのことが示しているようだが、どうにも不分明である。そこで、「自分自身についての錯覚と真理とが私には可能になる」事情を問うことに問題を置き換えて、私自身に係るこの曖昧な事態を考えてみる。

ここで思惟という行為に時間的な厚みを加えることで、真理と錯覚(誤謬)とを共に可能にする仕組みが現われる。例えば現在私が誤ったとして、その誤りをたとえ正したとしても、誤ったということは永遠に真となる。これに対して、真なる思惟にとって必要なのは次のことである。

「ただ単に実際に生きられた過去としてだけではなく、時間の連続の中で常に取り戻される絶え間のない現在としてもまた、思惟は真実に留まらなければならない」。[PP451頁]

つまり、不滅の現在として真実であることである。この点で、「事実の真理」と「理性の真理」の間に違いは無いものとされる。というのも、より一層完全な真理(理性の真理)に至るための段階とならないような誤謬(事実上の真理)は無いし、そうした事実上の真理を契機として持たないような理性の真理も無いからである。「事実の真理」と「理性の真理」の関係を敷衍する形で、二者択一的な関係を超越する基礎付けの関係という考え方が導き出される。

「全ての事実の真理は理性の真理であり、全ての理性の真理は事実の真理である。反省と非反省的なものの関係や思惟と言語の関係や思惟と知覚の関係と同様に、理性と事実の関係や永遠性と時間の関係とは、現象学で基礎付け Fundierung と呼ばれた二重の意味での関係のことである。基礎付けるものの規定或いは明示として基礎付けられるものが与えられるという意味で、基礎付ける項(時間・非反省的なもの・事実・言語・知覚)は基本的であり、基礎付けられるものが基礎付けるものを解消してしまうことはこの点で禁じられる。しかしながら、経験主義的な意味では基礎付けるものは基本的ではない。基礎付けるものから基礎付けられるものが単に派生する訳ではない。というのも、基礎

付けるものが明らかになるのは、基礎付けられるものを通じてであるからである。』
[PP451 頁]

反省-非反省・思惟-言語・思惟-知覚・理性-事実といった二項関係は対立的な関係と一般に捉えられているけれども、実は相互に否定的なものではなくて基礎付け合う関係にある。基礎付ける項の方が基本的であるからといって、基礎付けられる項をその派生体として基礎付ける項に還元してしまう訳にはいかない。というのも、基礎付ける項の明示として基礎付けられる項は与えられるものの、基礎付けられる項を通じて初めて基礎付ける項が明らかになるのでもあり、両項の間には相互依存的な二重の関係が在るからである。

自分自身についての錯覚・真理の可能性に話を戻すと、事実としての錯覚が基礎付けるものであって理性としての真理が基礎付けられるものであり、対立的に見える錯覚・真理の関係も基礎付けの関係と看做せる。つまり、錯覚を明らかにするものとして真理は与えられるものの、真理を通じてでない錯覚は在り得ない、という関係である。こうして、錯覚も真理も共に可能ということになる。さらに次の記述が在る。

「本当なのは、誤謬も懷疑も私達を決して真理から切り離さない、ということである。というのも、その誤謬や懷疑の解決を探求するよう意識の目的論が私達を促すような、そうした世界の或る地平にそれらは取り囲まれているからである。』 [PP456 頁]

ここで言う「意識の目的論」とは、「この第一の道具で以ってより一層完璧な道具を拵え、こうした道具で以ってまた更に完璧な道具を拵え、と次々と進んで終る所が無い」[PP453 頁]ものことである。誤謬や懷疑を重ねることでより良い解決を目指す絶え間ない試みを伴っている以上、そうした誤謬や懷疑によって真理から切り離されることは決してない、ということである。

以上で論じてきた通り、私は私自身と一致しない。けれども、一致しないことにおいて一致に向かう動きが在るのである。私自身に係る不一致とは、「基礎付けの関係」に支えられた逆説的な事態のことである。

(4) 私の「生の両義性」

最後に残ったのは、私と世界の間の一不一致に関する私の側の事情である。諸現象(例えば過去・世界)が現実存在する条件を論じる文脈の中で次の件が在る。

「過去と世界が現実存在するならば、原理上の内在性を過去と世界は備えていなければならぬ。つまり、私の背後及び私の周囲に私が見るものでしかそれらはあり得ない。また同じ条件の下で、事実上の超越性を過去と世界は備えていなければならぬ。つまり、私の明示的な諸活動の諸対象として現われる以前に、私の生の中にそれらは現実存在する。」 [PP418 頁]

その条件とは、「原理上の内在性」と「事実上の超越性」を諸現象が備えることである。続く箇所では、「原理」と「事実」の対比が更に展開される。すなわち、「一種の遍在性と永遠性を原則として私は持っている」 [PP418 頁]けれども、一つの展望が開かれることで「偶然性の感情や超出されるという不安をその展望と共に私は受け取る」 [PP418 頁]、という対比である。前者の「一種の遍在性と永遠性」が可能になるのは、「流れの始まりも終わりも私には思惟出来ない、そうした汲み尽せない生の流れ」 [PP418 頁]の中に私が据えられていて、「あらゆる不在は一つの現前の裏面でしかな」 [PP418 頁]いような超越論的領域に釘付けされていて、そして「私の思惟する本性を背にしてい」 [PP418 頁]るからである。ところが、その同じ「思惟する本性」によって一つの展望を通じて世界が開かれると、後者のような事態になる。つまり、他者のいる世界、「死一般の雰囲気」 [PP418 頁]を伴った生、という事実の中に私は据えられることになる。「思惟する本性」という契機を挟んで、超越論的領域・「汲み尽せない生の流れ」(遍在性・永遠性)と(他者のいる)世界・(死を伴った)生とが結び付けられることになる。これをメルロ-ポンティは「生の両義性」と呼ぶ。原則としての遍在性・永遠性という面と事実としての社会性・有限性という面の両面を私の生は備えているのである。

私(主体)と世界との関係に戻ると、世界の「原理上の内在性」・「事実上の超越性」という対比と「生の両義性」とが並行することになる。両義的な生を持つ私にとって、世界は内在的であると共に超越的でもある。その意味で、私と世界の関係は曖昧な(不一致な)ものとなる。

本節では、知覚の成立に係る存在論的な特徴として、世界と私の関係を検討してきた。(1)で論じた通り、世界と私の間には調和的な側面が在る。端的に言うと、身体を介して世界と私は絶えず意思疎通を行っている、というのがその調和的な側面である。私が世界を知覚する場合、知覚する私にとって知覚される世界は内在的なものである。しかしながら、(2)~(4)で論じた通り、私と世界の間にはあらゆる面で不一致が在る。先ず、常に彼方を持っているという意味で、世界自体が計り知れないものである。また、私自身にとっても世

界にとっても私という存在は曖昧なものである。それ故、私が世界を知覚する場合であっても、私が私自身を知覚する場合であっても、知覚されるもの(世界・私)は常にそれ自体を超えるものを含んでおり、超越的である。こうして、世界と私は内在的なものであると同時に超越的なものである。メルロ-ポンティの考える存在とは生成仕掛かりの存在のことであり、見える形(知覚される姿)に偶然になった存在のことである。メルロ-ポンティの存在論を「生成の存在論」と呼ぶことが出来る⁽⁶⁾。

3. 知覚論と存在論

以上で論じてきた知覚論と存在論はどのように結び付くのであろうか。『知覚の現象学』出版の翌年 1946 年 11 月 23 日に、「知覚の優位及びその哲学的諸帰結」と題してメルロ-ポンティが行った講演の中にその手懸かりを求めてみる。

「内在的なものと超越的なものとの逆説が知覚には存在する。すなわち、知覚するものに対して知覚されるものは外的ではあり得ないであろうが故に内在的であり、実際に与えられるものを超えるものを知覚されるものは常に含んでいるが故に超越的なのである。実のところ、知覚のこの二つの要素は矛盾ではない。それというのも、こうした展望的な考え方について私達が反省するならば、そしてまた知覚経験を思惟の形で私達が再現するならば、知覚されるもの自体の明証性や《或る事物》の出現によって不可分に求められるのはこの現前とこの不在である、ということを私達は解するであろうからである。」
[PC49-50 頁]

本節では、「内在的なものと超越的なものとの逆説」の存在という点と「知覚のこの二つの要素は矛盾ではない」という点に着目し、本稿で論じてきた知覚論と存在論を結ぶ筋道を確認する。

(1) 知覚おける「内在的なものと超越的なものとの逆説」

本稿 1.(1)で説明したように展望の仕組みを理解すると、見えないものを見えないことにおいて見る行為、不在のものを不在のものとして現前させる行為が知覚であることになる。つまり知覚することとは、見える以上のものを見ることである⁽⁷⁾。「実際に与えられるものを超えるものを知覚されるものは常に含んでいる」[PC49 頁]、と言える。それ故、知覚するものに対して知覚されるものは超越的である。

他方、1.(2)で見た通り、身体を以って世界に在ることで或る観点から私は世界を見るこ

とになり、そこに意味が生じる。同時にまた身体は一つの事物・対象でもある。知覚・感覚における世界との関わり方を論じる文脈の中で次の一節が在る。

「自らのために行動が拵える諸々の器具の彼方で、或る世界(Welt)に対して及び或る対象(Gegenstand)に対して人間の行動は開かれている。自分の身体を一つの対象として扱うことさえ行動には可能である。」 [PP377 頁]

世界及び対象に対して人間の行動は開かれており、また同様に自分の身体に対してもそれは開かれる、ということである。「開かれる s'ouvrir」ということの意味を考えると、自分の身体を他としてそこへと超え出ることが人間の行動には可能である、ということになる。この「行動」には知覚も含まれるから、知覚という場面でこの一節を解すると、世界・対象を見るのと同様に自分の身体を対象(他のもの)として見る事が出来る、ということである。世界を見る観点である身体が対象として見られ得るとはどういうことか。身体が見るものであることにおいて、同じ身体が見られ得るもの(可視的なもの)である、ということである。身体を間に挟む形で、「知覚するものに対して知覚されるものは外的ではあり得ない」 [PC49 頁] のである。それ故、知覚するものと知覚されるものとの関係は内在的である。

以上より、知覚するものと知覚されるものとの関係は内在的でもあり超越的でもあることになる。こうして、知覚において「内在的なものと超越的なものとの逆説」の存在が確認される。

(2) 「知覚のこの二つの要素は矛盾ではない」

しかしながら本稿 2.節で見えてきた通り、私と世界の関係というのは、どこまで行っても完全には調和的でないと共に完全には不一致でもない。つまり、存在論的に見て、世界と私の関係は内在的であると同時に超越的であることになる。ここから導かれるのは、知覚における「内在的なものと超越的なものとの逆説」を世界と私が生じさせている、ということである。言い替えると、内在的であると同時に超越的であるような世界と私の関係を想定するならば、「知覚のこの二つの要素は矛盾ではない」のである。

『知覚の現象学』におけるメルロ-ポンティの知覚論は展望という仕組みを核心に据えている。その限りで、「内在的なものと超越的なものとの逆説」が確かに生じる。だが、知覚論の射程は「生成の存在論」にまで及ぶ。そうした存在論に立つならば、展望を伴った知覚は逆説的な事態ではなくなるのである。

註

- (1) 外国語の分かち書きに「=」を充て、「・」は並列関係にある単語の列挙に用いる。
- (2) 引用箇所において、傍点部は原文斜字体、鉤括弧(「」)内は原文大文字。以下同じ。
- (3) ブラケット(())内は出典・頁。以下同じ。
- (4) Duchêne, J. La structure de la phénoménalisation dans la 《Phénoménologie de la perception》 de Merleau-Ponty (*Revue de Métaphysique et de Morale* Juil.-Sept.1978)) [Du]
- (5) 感覚について説明する箇所ではあるが、「感覚と呼ばれるものとは、知覚の中で最も単純なものことに過ぎない」[PP279 頁]とされていることを勘案すると、知覚の場合にも同じ事情が働くものと考えられる。
- (6) Du391 頁、実川敏夫 『メルロ=ポンティ 超越の根源相』(創文社 2000年12月)65頁。デュシェーヌによると、「存在は生成である。メルロ-ポンティの哲学の中心的な直観がここに在る」[Du392 頁]、とされる。
- (7) 『見えるものと見えないもの』の「研究ノート」(「可視的 不可視的 1960年5月」)には、「見ることは見る以上のものを見ることであるのが常である、と私が言う時、一つの矛盾という意味でこれを了解すべきではない。...(中略)...非-可視性を含むのは可視性そのものである、と了解すべきである」[VI295 頁]、という記述が在る。

使用テキスト及びその略号

- 『知覚の現象学』 *Phénoménologie de la perception* (Gallimard 1945, Dépôt légal: 3e trimestre 1981) [PP]
『見えるものと見えないもの』 *Le visible et l'invisible* (Gallimard 1964, Dépôt légal: février 2001) [VI]
『知覚の優位』 *Le primat de la perception et ses conséquences philosophiques* (Éditions Verdier 1996) [PC]

[哲学博士課程]